

13 三浦梅園における獸胎解剖の視座

近藤 均

三浦梅園（一七三三〜一八九）の解剖学者的な一面を小川鼎三博士が顕彰してから五十数年たつが、梅園の獸胎解剖の意義についてはまだ誰も論じていない。筆者はこれを、『贅語』身生帙の自筆稿本類マイクロフィルムをもとに考察した。

一七七九〜八〇年当時、梅園の解剖・生理学的見識は、方以智の『物理小識』から知り得たガレノス医学とほぼ同一の水準にあつた。すなわち、飲食物に由来する「液」は胃・肝臓を経て静脈を流れ、吸気に由来する「氣」は肺・心臓を経て動脈を流れて、それぞれ全身の末梢に至るとされた。しかし、八一年の『造物余譚』執筆時には、彼は『解体新書』に強い関心を抱くようになっていた。既に彼の動物解剖は多面化していた（彼が生涯に解剖した

可能性のある哺乳類は、鼠・兔・鹿・山羊・馬・猪・牛・獺・豚・犬である）が、この時期以降、彼は獸胎解剖にも励み、八二年頃の執筆と考えられる稿本（現物は散逸、写本を杉築市立図書館が所蔵）およびその後の四種の改稿本には、獸胎解剖による知識が記載されている。

胎児は、飲食物にせよ吸気にせよ独力で摂取することはできず、母体を経由して摂取するが、そのしくみに梅園は関心を抱き、獸胎解剖を進めつつ、その合理的な説明づけを模索した。彼が獸胎解剖に励んだ直接の動機はここにあつたが、『解体新書』妊娠篇第二十七に啓発されてもいたらしい。同篇には胎児の血液循環がほぼ正確に説かれ、静脈管（アランチウス管）・動脈管（ボタロ管）・卵円孔も記載されている。

梅園は、獸胎の臍から動静脈をたどり、臍動脈と臍静脈の形態・位置などを認識した。そして、母親の吸気に由来する「氣」は、二本の臍動脈を通り、腸をはさんで左右の総腸骨動脈へ入り、軽い性質のために大部分はそこから大動脈を通って心臓の左室、さらには頭部の方へ上行すると考えた。もちろん、大動脈弁のはたらきは理

解されていない。他方、母親の飲食物に由来する「液」は、臍静脈を通じて門脈に入る（臍静脈も二本あると読みとれるが、静脈管への分岐に着目しているからであろうか）が、そこから肝臓に入るのではなく、細い胃静脈・食道静脈をくねって流れ、さらに、それと吻合している奇静脈・冠状静脈洞を通じて心臓の右室に入ると考えた。そして右室からは、さらに上大静脈および下大静脈へ進むと確信した。「液」は「気」とちがって重いので下大静脈を自然に下行するが、上大静脈から頭部の方へ上行するのは心搏作用による、と考えたらしい。なお、動脈管と卵円孔への言及はない。

さらに梅園は、成体でも「気」「液」の流れのルートは基本的には胎児の場合と同じであると確信した。すなわち、「液」は、胃・十二指腸・総胆管・肝臓・門脈を経て以下同様に流れていく。「気」は、肺から腹腔へ漏出し、臍に極まると大動脈に入って以下同様に流れ、呼吸は肺静脈・気管を経て排出される。以上の確信は改稿のたびに深まっていた。このように梅園は、動脈・静脈に「気」「液」を対応させるというガレノス型の思考から決して

脱却できなかったので、『解体新書』に関心を示しながらも血液循環論を全く理解できず、しかも、皮肉にも、その「気」「液」の流れを実際の血流とはほぼ逆の方向に想定する結果となった。そう想定するきっかけを与えたのが、前述の、獣胎解剖にもとづく観察であった。

西洋では、既に「ヒポクラテス集典」中に獣胎の臍動脈・臍静脈を記載したらしい部分があるが、そういう伝統とは無縁な日本にあつて、『解体新書』刊行後一〇年足らずで梅園がみせた動物解剖・獣胎解剖への熱意それ自体は、間違いなく驚嘆に値する。しかし、解剖の所産としての彼の生理学体系をも含めたうえで彼の業績をどう評価すべきかは、極めて難しい問題である。三枝博音博士以来、梅園の科学的精神・実証的精神が喧伝されて久しいが、そう手放して賞賛するわけにはいかない。

（順天堂大学医学部医史学研究室）